

編集後記

今回も無事年度内に年報が完成できそうだ。原稿の応募から終校まで八ヶ月である。特集号を編集主導で組まない限りは、その間これといって編集担当がしなければならない仕事はない。裏方に徹すればよいのである。その裏方もこれまでの蓄積からルーチン化できている。講義や研究に大きな障害になるということはない。

しかしこれでは編集の役割は何なのか、という疑問が湧く。大きな研究所の機関誌なので原稿を公募し、特定の量に達しないときは依頼せざるを得ない。更には研究者の成果の自由な発表の場となっていることから考えれば先のような疑問は無意味かもしれない。逆に大きな研究所であるが故に特集を組み易いかもしれない。これも簡単には行きそうもなさそうだ。テーマを決め、執筆者を選ぶ段階で、講義の負担のみならず、各種の委員といった仕事が重なれば原稿依頼は簡単にはいかない。

こう考えると年報の編集方法で最も良い方法は自由に原稿を集めて来るか、数年先から「特集号」を予定して、共同研究の助成金を出して準備しておくことになろう。今回は前者である。その際編集の主たる仕事は最終段階で「校正」する事になる。執筆者の熱意の伝わる原稿をいち早く読めるというメリットはある。無論勉強にもなる。年報を完成させたという喜びもある。しかし一抹の不完全燃焼に近いものを感じるのも確かである。

来年は日本およびアジアの金融危機をテーマにして「特集号」を組むのも良いかもしれない。社研も最近ではしばしばアジアに調査に出かけている人が居る。アジアの専門家、金融の専門家もいる。いかがであろうか。

大学を取り巻く環境は一時と比較して厳しさを増してきている。学生諸君の希望を叶える方向（これは現代社会が青年に要求していることとも密接に関連しているが）での態勢づくりだけでなく、我々自身の「研究」や「教育」に関しても又「大学」という職場に勤務する「労働者」としての態度も問われているのである。古いものを簡単に脱ぎ捨てられない。蓄積していくことが社会にとり重要であり、困難でもある。この年報も継続し、良いものが付け加えられる事を願っている。

(黒田彰三)